

## 研究目的

現代社会に「観光」と称される社会現象や行動が存在し、それらとかわりをもつ事業活動が存在していることはよく知られている事実である。日本を含め工業化が発展した諸国においては、「観光」は国民生活の一部となり、一般大衆のものとなっているとされる（前田，1991）。しかし、この「観光」という現象の大前提にあるのは資本主義に基づいた西欧社会であると考えられる。これは18世紀後半イギリスで始まった産業革命以降の工業化や大規模な工場制生産、生産技術の発展などによる経済的社会的革命以降、人々が労働により賃金を得ること、そして余暇を自由に得るようになったことと関係しており、このような社会変化が後の観光の発展に大きな影響を及ぼした。つまり、近代観光は労働の中から発生し、労働と余暇を明確に区別することにより発展してきたのである（小池ほか，1988）。

以上のことから、現在一般に議論されている「観光」の理論の枠組みというのは、ある限定的な社会のもとで作られた枠組みを適用して議論されている可能性がある。たとえば、旧ソ連の社会主義国キルギスで行われていた温泉施設<sup>1</sup>への旅は、「観光」に似ているが、実際には、ソ連時代は労働で成果を上げた人しか行けず、温泉施設へのバウチャーの割り当てはソ連の首都モスクワで行われていた（アコマトベコワ，2012）。これは、日本や西側の社会における「暇だから、温泉に行ってください」というライフスタイルではなく、国家が「観光」までコントロールしていたからであり、資本主義国の下での「観光」とは異なっていたからである。このような社会体制と観光との関係についての研究はいまだに十分になされていないが、少数の研究者が観光史を社会体制という観点から分析している。Gorsuchら（2006）は、社会主義国であった旧ソ連において行われていたヨーロッパへの「海外旅行」はただ単に地理的に国境をこえるのではなく、社会主義的体制から資本主義体制への移動を意味していたのだと指摘している。また、Baranowskiら（2001）は、「観光」や「バケーション」とは消費やレジャーの発達プロセスの一部であり、社会階級、社会的地位、集团的アイデンティティの形成を母体として歴史的变化を遂げるものである、という観光研究に対する史学的アプローチを主張している。以上の背景から、本稿は社会体制の変化に伴う「観光」、「楽しみ」の変容を、ポスト社会主義国であるキルギスの温泉施設観光を事例に、あるキルギス人のライフヒストリー調査を中心に歴史社会的、観光的な視点から明らかにすることを目的とする。

本稿では聞き取りによる口述史や、スケジュール帳や写真といった個人の所有物からある人物のライフヒストリーを再構成することを試みる。

## 研究結果

帝政ロシアの国家統治支配を受ける以前のキルギスにおける温泉の利用は現在とは異なっていた。温泉は中央アジアを始め中国やインドといった域外からの信仰者が訪れる神聖な場所であった。また、温泉はかつて遊牧民族であるキルギス住民が体を清めるために必要不可欠な場所であり、さらに現地住民が病気を治す貴重な病院代わりになっていた。しかし、以上のようなキルギスの温泉は帝政ロシアの植民地的主義的支配という外部からの影響によって大きく変化していった。帝政時代のロシアの南下政策により赴任して来た国防省や役人のために、温泉や泥温泉の周辺、山岳部や溪谷といった場所に夏の休暇・治療用の施設が作られるなど、帝政ロシア政策により、キルギスを含む中央アジアの温泉利用が変化した。

本稿では、ソ連時代とソ連崩壊以降90年代頻りに温泉施設で休暇を過ごしたA氏のライフヒストリーからは、キルギスの「温泉観光」に社会体制転換が与えた具体的な様々な影響が明らかになった。A氏が生まれた1952年のソ連経済は難しい状況にあり、A氏も幼い頃から夏休みにアルバイトをして両親を経済的に支えなければならなかった。

A氏は大学生時代、秋になると綿花の収穫に行くのを強制されたが、働いた分の給料ももらえ、観光もできた。ここからは観光が自由にできる資本主義とは異なる社会主義体制下の観光のあり方を見て取れる。また、A氏によると、この時期には生活水準が良く、医療費や教育費などが無料であったため、日常生活で困ることはなかった。給料も生活必需品の価格と合っていたため、消費するだけでなく貯金することも可能だったとのことである。ブレジネフ時代にはキルギスの発展も進み、労働者のための温泉施設や休暇施設も増加した。そのためA氏もブレジネフの時代を一番良い時代であったと記憶している。

<sup>1</sup>キルギスにおける温泉施設は、キルギス語とロシア語ではクロールト（Курорт）と呼ばれ、温泉、泥治療、マッサージや物理学治療を提供している施設である。本稿ではこれらの総称として「温泉施設」という表現を用いる。

しかし、A氏のライフヒストリーをみると、ソ連時代には日常生活ではさほど困った問題は存在しなかったが、何らかの労働に従事していない限り温泉施設を利用することはできなかった。また、簡単に海外に出ることが出来なかった。国内旅行も国家や労働に関係する計画、あるいは親戚を訪ねるといった理由がなければ難しかった。このことは、帝政ロシア時代にはトーマス・クックの影響により一般化していた海外旅行が中断したことを意味する。

この結果、社会主義体制下では資本主義社会のような自由な観光が不可能になったため、西欧社会とは異なる「観光」の姿が見られるようになったのである。その特徴とは、「労働」と「観光」が密接な関係にあったこと、およびそれらを国家が統制していたことである。この時代には社会体制と観光の形態が密接に関係していた。そしてそれは個人の観光の形態の変化からも見て取ることが可能である。例えば、社会主義体制時に国会議員や医者を務めた上級階級に位置するA氏は、労働の成果の報償として、国から家をもらい、ドライバー付きの車も仕事で使えることもできただけでなく、温泉に行ったり、仕事が理由でモスクワやウクライナまで観光したり、長休暇の際に温泉施設を使用したりしていた。つまり、「温泉観光」をするには、成果を上げるほどの労働をしなければならなかった。

また、A氏はソ連時代に共産党書記と一緒にカザフスタンまで旅行に出かけていたが、それには打算的な意図があったようにも読み取れる。その理由は、社会的な上昇を可能にしてくれる上司に対し、お祭りや転勤の際に感謝の念を表すためのプレゼントとして渡していた謝礼品が人間関係を強めていたのではないかと考えられるからである。社会主義では人間関係が「資本主義のお金」にあたり、さらに上層部との人間関係が良ければポジションが上がり、それが温泉施設へのバウチャー入手に繋がることを意味していたと考えられる。これは、資本主義社会のように、経済的な余裕があればいつでも「観光」ができることとは異なっている。社会主義体制下の「温泉観光」は人間関係とも深く関係していたといえるのである。

また、A氏に子供は5人がいたが、毎回温泉に行く際に子供たちを妻の両親に預け、夫婦2人だけで「温泉観光」に出かけていた。このことには、「温泉施設」の訪問には夫婦の健康維持以外の目的もあったことがうかがえる。「温泉施設」とは夫婦2人だけで共産党や労働の話をする場所でもあったため、うかつに子供を連れていくと口を滑らす可能性があるため、あえて連れて行かなかったのだとも考えられる。ソ連時代、スターリンが残した監視されているという疑いの目が人々の考えに深く浸み込んでいたことが推測される。

ソ連崩壊直後からキルギスが国家として安定するまでは、温泉施設の利用のためにはソ連時代と同様、バウチャーを利用する必要があった。2014年現在も引き続きバウチャー形式が継続されている施設がある一方、近年ではバウチャーなしでも「温泉観光」ができるようになった。しかし、これは、A氏にとってはむしろ悪影響を与えた。その理由は、ソ連時代が労働での成果をあげれば国家から「温泉観光」が補償されていたことに対し、資本主義体制を選択したキルギス国家がA氏の「温泉観光」を保証できなくなったことを意味するからである。独立後のキルギスで資本主義化が進むことにより、お金を払えばいつでも温泉施設に行けるようになった。だがもらう給料の額と生活必需品の価格とが必ずしも釣り合うとは限らず、またソ連時代とは異なり現在では子供達の教育費等も自己負担する必要があるため、温泉施設に行くための金銭的な余裕がなくなった。この点で現在のキルギスにおける観光は、国家が資本主義体制へ転換したことにより、「温泉観光」まで資本主義化したのである。

他方、資本主義体制に転換したことによって、「海外旅行」といったソ連時代には自由に出来なかった観光形態が現れたことにも注目できる。その他にも、資本主義化以降に大衆化された「湖観光」や、都市化とともに生まれた「草原（ジャイロー）観光」の自由化といった新たな観光形態も誕生するようになった。A氏の「観光」も、社会主義時代の妻と2人だけでしか行けなかった「報償としての夫婦温泉旅行」から、バウチャーなどに頼らない「自由家族観光」に変化したのである。つまり、A氏の「温泉観光」の変遷には、彼のライフステージの移行はもちろん、国の社会体制が大きな影響を与えてきたのだと考えられる。

以上のように、A氏のライフヒストリーから見たソ連時代の「観光」は、西欧社会の「観光」とは異なるパターンを取っていた。だが、従来の「観光」という現象を研究する際の大前提にあるのは資本主義に基づいた西欧社会であり、そしてそれは一つのステレオタイプに過ぎないといえるのではないだろうか。本稿でA氏のライフヒストリーを資料とすることにより議論してきたように、社会体制転換に伴う「観光」の変容を理解するためには、従来のように資本主義に基づいた西欧社会を過度に観光の前提とするのではなく、観光する個人の経験を社会体制の変化の中に位置づける作業が必要なのである。